

第 91 回輸送計画委員会議事の記録

1. 日 時：令和3年6月18日（金）14:00～16:00

2. 場 所：オンライン開催（※文部科学省 研究開発局 1 会議室）

3. 出席者：

（委員）

青山 剛史	国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構航空技術部門 数値解析技術研究ユニット長
飯島 朋子	国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 主任研究開発員
石坂 丞二	国立大学法人 東海国立大学機構名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授
宇都 正太郎	国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術研究所 海上技術安全研究所 顧問
梅村 行男	独立行政法人 航空大学校 特任教授
大沢 直樹	国立大学法人 大阪大学大学院工学研究所 教授
沖野 郷子	国立大学法人 東京大学大気海洋研究所 教授
庄司 るり	国立大学法人 東京海洋大学学術研究院 理事・副学長
土屋 武司	国立大学法人 東京大学大学院工学系研究科 教授
万谷 小百合	独立行政法人 海技教育機構海技大学校航海科 准教授
末富 理栄	防衛省人事教育局人材育成課長（欠席）
萩原 祐史	防衛装備庁プロジェクト管理部事業監理官（艦船担当）（欠席）
射場 隆昌	防衛装備庁プロジェクト管理部事業監理官（航空機担当）（欠席）
里見 晴和	防衛装備庁長官官房艦船設計官付主任設計官（欠席）
酒井 洋飛	防衛省海上幕僚監部装備計画部艦船・武器課水中武器班長 （木下防衛省海上幕僚監部装備計画部艦船・武器課長代理）
日田 豊久	防衛省海上幕僚監部装備計画部航空機課回転翼班長 （大塚防衛省海上幕僚監部装備計画部航空機課長代理）
佐藤 信一	防衛省海上幕僚監部防衛部装備体系課艦船体系班員 （一柳防衛省海上幕僚監部防衛部装備体系課長代理）

齋藤 一城 防衛省 海上幕僚監部 防衛部 運用支援課 南極観測支援班長
伊藤 真澄 国土交通省総合政策局技術政策課長（欠席）
楠 勝浩 海上保安庁 海洋情報部 海洋調査課長
（石塚海上保安庁総務部政務課長代理）
吉本 直哉 海上保安庁装備技術部航空機課長
野木 義史 国立極地研究所 総括副所長
大土井 智 文部科学省 研究開発局 海洋地球課長（欠席）
盛田 謙二 国立極地研究所 南極観測センター 副センター長（事業担当）
（オブザーバー）
中村 卓司 国立極地研究所 所長
伊村 智 国立極地研究所 副所長
橋田 元 国立極地研究所南極観測センター副センター長（観測担当）
第 62 次南極地域観測隊隊長（兼夏隊長）
青山 雄一 第 61 次南極地域観測隊副隊長（兼越冬隊長）
金子 宗一郎 第 62 次南極地域観測隊副隊長（兼夏副隊長）
牛尾 収輝 第 63 次南極地域観測隊長（兼夏隊長）
澤柿 教伸 第 63 次南極地域観測隊副隊長（兼越冬隊長）
（事務局）
吉野 明 文部科学省 研究開発局 海洋地球課 極域科学企画官
小野寺 多映子 文部科学省 研究開発局 海洋地球課 課長補佐

4. 議 事：

- (1) 事務局より、当日の議題・配布資料について確認があった。
- (2) 以下の議題について、報告及び審議がなされた。

《報告事項》

1. 輸送計画委員会について
2. 南極地域観測事業の概要について
3. 第 6 1 次越冬隊・第 6 2 次観測隊の活動報告及び現況について
4. 第 6 2 次南極地域観測における輸送協力等について

《審議事項》

5. 新型コロナウイルス感染症の状況下における第63次南極地域観測に関する基本的な考え方及び対応方針（案）等について
6. 第64次南極地域観測計画の概要（素案）等について

主な意見は次のとおり。

（議題4）

【梅村委員】 橋田先生の御説明で、今回、「しらせ」が直行直帰で、1万6,000マイル無寄港・無給油で帰ってこられたということだが、航海中のトラブルはなかったか。海上自衛隊の方は慣れていると思うが、隊員の方々は精神的にいかがだったか。

【橋田第62次観測隊長】 航海そのものを無補給で行うということに関しては、「しらせ」の運航を担当されている海上自衛隊の方から次の部分で報告があると思う。梅村先生の御質問のうち、隊員のメンタルヘルス的な状況についてどうであったかという質問に関してお答えする。例えば海洋観測等であれば、1か月ぐらいの航海というものは通常ある。その後、昭和基地に着くため、それ自体が長いと言われると、通常の航路でも「しらせ」の復路は1か月以上かかる。昭和基地に向かうまでの1か月間というところと、それから、船に乗る前に2週間の個室隔離があったため、ようやく皆で会話ができたりとか、対面できたりとかするような効果のほうが大きかったため、それ自体は大きな問題とは私自身は捉えていない。

【万谷委員】 今回、62次において多年氷が発生したということで、確か57次のように多年氷で9日間の砕氷航行期間があったと記録されているかと思うが、近づいたために多年氷のラミング回数が多くなったという理解でよろしいか。

【齋藤運用支援課南極観測支援班長】 これについては、距離的なものではなくて、定着氷の中を航行しているところで、途中、ところどころ、多年氷帯が発生していたり、氷の状況が一定じゃなかったりというところでラミングの回数が増えたという認識をしている。

【万谷委員】 二、三年置きに多年氷が押し寄せてくるような傾向があるのか。

【齋藤運用支援課南極観測支援班長】 私も長期間行っているわけではないが、おおむね

10 年程度の周期で氷厚が厚くなっていくというには聞いている。必ずその次の年が厚いというわけではないというのも、認識としては持っている。

【野木国立極地研究所総括副所長】 昭和基地付近の氷が崩壊したときに一度クリアされるが、多年氷は昭和基地近辺は毎年毎年少しずつ氷が厚くなっていくセンスはある。多年氷は変わらず、一定期間はある。それが流れたときはずっと入れる状態だが、多年氷は大体常にあると理解していただいていると考える。

【宇都委員】 今回は、日本に帰港したときに 30 数%の燃料が残っていたということだが、海氷の状況を見ると、比較的マイルドである。ラミングも 400 回ぐらいであればそれほど多いとは言えないと思うが、今後のことを考えると、かなり氷が厳しくなったときにどのくらいのラミング回数で接岸に持っていけるかシミュレートしておいたほうが良いと考える。もし御検討されているのであれば、教えていただきたい。

【齋藤運用支援課南極観測支援班長】 54 次等で接岸ができなかったときには、ラミング回数が 5,000 回を超えているというふうに認識している。一方で、ラミングについては、毎回同じ燃料を使うわけではなく、氷厚等も含めて、状況によっては、ラミングをしても燃料はそこまで消費しない、また、ラミングの回数が少なくても燃料を消費するということはある。ただし、ラミングを平均するとどれぐらいの燃料が使われるというのはある程度換算できるため、氷状を見ながら計画をしているというのが実情である。この場で明確な数字というのは持ち合わせていないため、必要であれば、後ほど回答させていただく。

【宇都委員】 特に数字が必要ということではないが、そういう計算もされて臨まれているということだと理解した。

(議題 5)

【沖野委員】 隊員の方も、「しらせ」の乗員の方も、ワクチンは何か計画があるのか。

【小野寺海洋地球課課長補佐】 南極観測隊ということでワクチン接種をするというのは、今の時点では、社会状況もあり計画していない。ただ、秋までの間に各々の方がそれぞれの場所で受けられれば受けていただくということにしている。

【梅村委員】 途中、フリーマントルに寄港できなければ、当然、観測隊のヘリはチャーターできないのだろうが、62 次でチャーターなしで行った際にデメリットもあったのでは

ないか。メリットとデメリットという面からどのようなことが想定されるか、教えていただければと思う。

【齋藤運用支援課南極観測支援班長】 まず、デメリットとしては、航空機のチャーターについてはできるのかもしれないが、パイロット等については、隔離措置ができないということが考えられる。その場合、「しらせ」艦内で広まるという可能性も十分考えられるので、その点がデメリットでありチャーターしない一つの理由になっていると認識している。

逆に、チャーターしない場合のデメリットは、野外観測に行く場合のヘリの行動範囲の制限が一部出てくるが、2機搭載して行っているため、その点はカバーできると考えている。

【万谷委員】 昨年、報告を受けた中では、「しらせ」では1人1部屋の確保ができたという報告があったが、人数が増えることによって、特に往路では1人1部屋の確保が可能なのか。隔離部屋などの措置は感染症の専門家を入れているのかと思うが、部屋の状況を教えていただきたい。

【野木国立極地研究所総括副所長】 部屋は、2人1部屋という通常レベルに戻す予定。感染症の専門家の方ともいろんな話をし、国内外のプロトコル等も見て、いろんなことを総合的に判断した上で、乗船前の検疫隔離は非常に重要で、そこをスクリーニングすることによって元に戻して大丈夫であろうということで、今回はこのような形で進めたいと考えている。

【万谷委員】 韓国隊は船の中に陰圧室まで設けられているが、「しらせ」は隔離部屋だけか。

【野木国立極地研究所総括副所長】 そのとおり。

(3) 事務局から次回の会議日程については、委員の都合を確認の上、連絡する旨の説明があった。

— 了 —

以上